



「肉まん」

A・M（51歳）

息子が高校3年生で、受験生だった10月の初めのこと。センター試験まで約100日余りとなっていた。受験生には土曜も日曜もない。授業以外にも補習やら模試やらで忙しく過ごしていた。そんな時、親にできることは、食べさせて眠らせることくらいだった。そのオプショで、よく学校近くまで迎えに行っていた。

息子を迎えに行ったとき、コンビニに寄ると肉まんが売られていた。「もうこんな季節なんだ…」と思い、1つだけあった肉まんを買い、車で待っていた。

やおらやってきて、シートに座り込んだ息子に肉まんを渡すと、

「おっ、サンキュー」

と言って受け取り、半分にして

「かあさんも食べる？」

というので、

「食べる！食べる！！」

と言って分けてもらった。私が食べ終わって、車を走り出したころ、息子が言った。

「来年の今頃、肉まんを食べたら『去年は母さんと肉まんを食べたなあ』って思い出すかなあ」と。

県外の大学を目指している息子のことばを聞いて、私は涙が止まらなくなった。それでも強がって、

「そうなるようにしっかり勉強してよね」

と言ったが、息子の受験勉強期間は私の子離れの練習時期なのかもしれないと感じた。

肉まんを見ると、ふと思い出す、鼻の奥がちょっとだけツーンとする思い出である。



「十数秒の電話」

柘植克彦（81歳）

「二人とも無事だから心配しないで。暫くは友人宅に身を寄せることにしたから。ごめん、電話を待っている人がいるので、これで切るよ。二人とも大丈夫だからね。」

十数秒で電話は切れた。しかし、私たち夫婦には、生きていることの確かな証を感じさせる十数秒だった。

二十四年前の一月十七日早朝、激しい揺れに驚き、テレビ画面いっぱい広がる神戸市の惨状に言葉を失った。

大学卒業後、双子の娘はそれぞれの就職先を見つけ、同じアパートで希望にあふれた暮らしをスタートさせたのが神戸市だった。その神戸市が壊滅的な打撃を受けているではないか。今にも泣き出しそうな妻を励まして受話器を取るが、聞こえてくるのは「回線が混乱して」という機械音だけ。それでもと思い、繰り返し受話器を取るが、一向につながる気配はない。

娘たちの無事を祈るしかない私たちに、午後三時過ぎ一本の電話がかかった。娘から無事を知らせる電話である。近くの区役所仮設の災害用公衆電話からとのことで、順番を待つ人の長蛇の列が続いているという。声を聞いて泣き出し座り込んだ妻の肩をなでながら、私の目も遠くが見えなくなった。

大学や高校生の子を持つ親になった娘たちは、もう覚えていないかも知れない。しかし、私たち夫婦には、生きることを教えてくれたこの十数秒を決して忘れることはないだろう。



「伝えるべきもの」

H・H（49歳）

厳しい父に手ぐすね引かれ、将棋を始めたのは、入学まだ浅き小学生のころだった。

圧倒的な存在だった父に抗うすべもないその様は、親子というより師弟関係のようなものだった。

不思議と父に対する尊敬の念はなく、ねじ伏せられ、悔しい思いを繰り返し、全てに弱かった自分の記憶しか残っていないが、高校では地区大会で優勝することができた。

そのとき、父は黙ってうなずいてくれた。

こころの弱かった少年は、やがて父親となり、今はこうして息子と将棋盤を挟んでいる。

あのとき、父親は私に何を伝えたかったのだろう。確かなことは、私の奥底に「自分に負けない強いところ」が宿されたことだ。

この「こころ」は、自身を支える大きな拠り所となり、これからも変わることはないだろう。

ふと、息子の目を見してみる。少し驚いたようだ。この瞳に何を伝えるべきなのか。答えは未だ見えてこない。

少年が抱いていた父への思いを重ね合わせると、持ち時間はあまり残されていないのかも知れない。

求めるべき手がかりを探すため、息子の「こころの陣地」に向け「負けないこころ」を持った少年はひたすらに駒をすすめる。



「合歓の花」

Y・M（59歳）

「Y子さん、この花、何て言うか、知っちゃーかね。」「え?」「これは『合歓の花』だよ。」隣家に住む義父との窓越しのやりとり。

当時、私たち家族は、長男の小学校入学にあわせ、夫の実家の隣に住み始め、半年ほど経っていた。でも、実家と我が家の丁度真ん中に立つ背高の木も、この木に咲く刷毛のようなピンク色の花も、私の目には、入っていなかった。

『家庭と仕事の両立を』と常にカリカリとして生活し、余裕のない私に、「もう少しゆったりとして」と言葉をかけてくれたのだと思う。

その義父も20年ほど前に亡くなったが、義母と一緒に、私の二人の息子を可愛がり、共働きの私達のサポートをしてくれた。

今ではこの木もないけれど、その道中で、このピンク色の花を見ると、義父との短いやり取りを思い出す。

今では、長男も結婚し父となった。

私は…定年退職まであと1年。

「おとうさん、おかげさまで、何とかここまで来ましたよ。もう少し見守ってくださいね。」



「割烹着」

Y・O（39歳）

私には忘れられない光景があります。夏に地域の伝統芸能である田植え囃子に参加した時のことです。高齢化と過疎化で若い世代の演じ手がおらず、1ターンの私に歌手の早乙女役として声がかかりました。私のようなよそ者が参加してもいいものかと気後れし、馴染みのない節や歌詞を録音して懸命に練習しました。この地で二人の子どもを授かり、慣れない土地での子育てに日々精一杯でした。

当日は田植え囃子を盛り上げたいと、地元のおばあちゃんたちも手作りカレーをふるまうために、朝から調理に大忙しでした。私は長時間の早乙女の衣装の着付けがやっとすみ、太鼓やお囃子に続いて歩き出しました。その時です。調理室の窓から、おばあちゃんたちが白い割烹着姿で身を乗り出し、「がんばれー！」と口々に声援を送ってくれました。その姿が故郷長崎の亡くなった祖母と重なりました。もし祖母が今ここにいたら、きっとこんな風に力いっぱい応援してくれただろうと思うと、有難い気持ちで胸がいっぱいになり、涙がこぼれました。

祖母は網元に生まれ、生涯をかけて家を守り、長崎の漁師町で力強く生きてきた人でした。その姿が、風土の厳しい島根の山間で生きているおばあちゃんたちと重なって見えました。

第二の故郷をくれたおばあちゃんたち、いつもありがとう！



「日本沈没とドリフターズ」

棕 貴司（52歳）

私も両親も、生まれも育ちも島根県民ではあるが、私が小学1年から4年生までの3年間だけ、父の仕事の都合で大阪に住んでいた。狭い社宅のアパートで家族5人、決して裕福とはいえない生活環境だったが、月に一度だけ大阪の中心部に電車でお出かけ、デパートで食事をしたり、映画を観たりするのが、家族の唯一の贅沢であり楽しみでもあった。

私が小学2年生の頃、映画「日本沈没」が日本中で大ヒットしていた。私がどうしてもこの映画を観たいとねだるので、父は「お前なんか観ても、内容が分かるか？」と渋ったが、私の根気に負けて、家族で映画館に行った。ところが空前の大ヒット映画である、館内は立ち見が出るほど満杯で、私達も座ることが出来ず、立って人の頭の隙間からスクリーンを見るような状態だった。

小さな子供がそんな状況を我慢できるはずもなく、案の定、20分位でシビレを切らして映画館を出ることになった。

父は「ほれ、見たことか。」といった顔をしたが、それ以上何も言わず、別の映画館で、ドリフターズの映画をゆっくり座席に座って家族で観た。映画は爆笑に次ぐ爆笑で、我々は充分ドリフの映画を堪能して家路についた。

後年、TVの映画番組で「日本沈没」を最初から最後まで観た。内容も良かったが、私の脳裏には、あの頃、高度経済成長の最中、まだ若く、貧しい両親が私達3人の子供を育て、一生懸命生きていた姿が甦るのであった。



「私の2つの思い出」

葉田優希（17歳）

十一年前の今日、私に家族が増えました。六歳離れている妹は、たまに生意気だけど、とてもかわいいです。妹が生まれるということは嬉しかったけど、家族が増えたことで、お風呂や食事の時間のサイクルが変わり、慣れるまで大変でしたが、毎日妹の成長を感じられることが嬉しかったです。

十年前の十二月には私にはもう一人家族が増える予定でした。しかし、帰ってきたのは母親と、小さなつぼでした。増えるはずだった小さな家族が、骨になって帰ってくるとは小学生の私には考えられませんでした。赤ちゃんは生まれてくるのが普通だと思っていました。

「赤ちゃんが生まれてくるのは奇跡なんだよ」と、母が教えてくれました。だから、私が今、ここにいるのも奇跡です。

私の家族の思い出は、妹と、会ったことはない弟が家族に増えたことです。弟が家族になった時からずっと、家のリビングでいつでも私たちのことを見守ってくれています。これからも家族全員を大切にしていきたいです。



「暗がりの中のもし火」

M・O（50歳）

私がまだ子供だった頃は、停電する事がたまにあった。それは、台風で風が強くなったり、はたまた、なんの理由かわからないけれど、パチンと真っ暗になってしまうことがあった。

雨風のごうごういう音と共に、突然真っ暗になってしまうときは子供心に恐怖だったのだが、そんな心細さを吹き飛ばすように、わーわー言いながら、暗がりの中、家族中で、ろうそくを探したり、懐中電灯を持ってきたりして、みんなで手を繋いでひとつの部屋に集まって、とぼとぼとした、不安定なろうそくの炎を見つめていると、なんとも言えない安堵感と、一人じゃない安心感に包まれて、怖いはずの暗がりや雨風の音も、気にならなくなってくる。そのうちに電気がついて、非日常から解放される。普段当たり前になっている電気の大切さをヒシヒシと感じながらも、何も無い、ろうそくだけを眺めている家族と一緒にいたあの頃を、大人になって思い出すと、心の中にポッと温かな光が灯る。

数年前のお正月、豪雪で家の近くの電線に木が倒れて丸一日停電になったことがあった。今では珍しくなった停電にちょっとテンションが上がったが、寒さとお正月番組も見れず、料理もできずお風呂にも入れない状況に、泣きたくなった。

停電はほんの短い間がいい。



「我が家の恒例行事」

M・T（52歳）

子どもの頃、一年の間で一番楽しみだったのは大晦日とお正月でした。毎日9時就寝と決まっていた我が家も、大晦日は祖父母も加わり、家族全員で紅白歌合戦を見ながら年越しそばを食べ、大トランプ大会の開始です。子ども相手でも容赦はなく真剣勝負で、勝った、負けたと一喜一憂。私が何よりもうれしかったのは、普段は家族の世話で忙しくしている母もトランプに参加し、笑っていたことです。

私も結婚して3人のこどもの母になりました。遠方に嫁いだため、お正月には必ず家族そろって帰省します。そしてあの大トランプ大会が始まります。普段ゲームに夢中の子どもたちもこの日ばかりはトランプで大はしゃぎ。母と私が食事の準備でゲームを離脱すると、「早く一緒にやろうよ！」とせかします。年に一度の恒例行事は夜遅くまで続けました。

正月も終わり、家に帰るとき、「来年もまた来るからね！」とおばあちゃんが見えなくなるまで手をふりながら、必死で涙をこらえている子どもたちの姿が今でも目に焼き付いています。

今ではみんなすっかり成長し、先日、三男が成人式を迎えました。今度は孫たちとこんな楽しいお正月を迎えたいと思い描いています。



「未来へ」

I・T (55歳)

もうすぐ春が来る。末娘が病気に倒れてから 10 年目の春が来る。私は長女、長男、次女、三女と 4 人の子ども達に恵まれた。仕事と家事と育児に追われた毎日。三女の異変に気づいてやれず本人の大丈夫の言葉を鵜呑みにし続け、顔面蒼白になり自分の足で立てなくなるまで我慢させてしまった。地元の市立病院から隣町の総合病院へ緊急搬送。説明は夫婦揃われてからと言う主治医の言葉。次々に娘の体に管が繋がれていく。命を繋ぐための輸血。何が起こったのか茫然とした 10 年前のあの日。「なぜ?」「どうして?」の思いばかりが募り、体が震える、涙がこぼれる。

高校 1 年の次女、高校 3 年の長男、家を離れ大学生の長女。それぞれの事情があり、家族がそろう時間も減っていたが、事も有ろうに末娘の病により全員集合。ここでくじけてはいけない。病に倒れた娘があんなに頑張っているのに。口には出さないが「大丈夫」と各々の心に言い聞かせる日々、闘病中、献身的にお世話してくれた看護師さんにあこがれ感謝し三女は看護師になる未来を目標に病と闘った。あれから 10 年。三女は今も病と闘いながら今度は自分が誰かの役に立ちたいと、自分が闘病していた病院の看護師として働いている。あの時のあこがれの看護師さんと同じ病棟での勤務という。偶然ながら運命的な再会も果たした。あの日の辛さを忘れられないからこそ、私達家族はこの日常を幸せに思う。待ち受ける未来に希望を感じながら。



「母」

山藤法子（71歳）

20代の後半ごろ、休日に家にいると、必ず父は「今日は予定はないのか。ドライブするか」と言った。あの頃、車にはナビもなく、道路地図や標識をたよりにドライブするのだった。

その日も父は「山口県立美術館までドライブしよう」と言った。朝早く家を出たので、お昼前には着くかと思ったが着かなかった。父は方向音痴なところがある。美術館を2時過ぎに出たのだが、9号線に出られない。あれこれ走っていて、徳佐のリンゴ園に着いた。もう夕方5時前、父は「りんご狩りをしよう」と言う。園は閉まる時間だったがりんご狩りをさせてもらえた。

その後、家に帰ろうとするが9号線に出られない。「運転かわろうか」と言うが「大丈夫」と父。助手席の母は私のイライラに気が付いたのか、「家族3人そろっているのだから急いで家に帰らなくてもいいじゃない。お腹がすいたら後部座席に、おまんじゅうや果物、飲み物があるから食べなさい」と。スピードを要求している時代に乗り遅れたような私の家族。

家族の誰かがもたもたしても、なじるわけでなく、その行動を見守って肯定する母、失敗してもおこらない母、そして出口は必ずあると言ってそだててくれた母。こんな母がいたから、人様に「笑いの絶えない家庭」と言われていたのだろう。私はこんな家族の中に生まれたことを感謝。